

●暗雲のすき間から光が差し込むと、シーバスの活性が上がってきた



巻きで追いかけてくるけど
食い切れず、フールで掛かる
ケースが多かったような気がする。



◀巻き上げて60センチ級のシーバスを釣り上げた

かわらず、バラしてしまった。そのすぐ後に、イチロウこと鹿島一郎さんにもヒット！だが、やはりバラシ……。

「群れが散っちゃうから、なるべくバラさないでね」と金子船長が笑いながらアナウンスする。だが、メガネの奥の目は笑っていなかった。

「シーバスは、バラすと群れが散っちゃうんですよ、ホントにリリースしても同じですね。たぶん、シーバスの間で情報がやりとりされてるんですよ。ヤバイですよ、シーバス(笑)」

シーバスをバラすと、群れが散る。これは都市伝説のように言い伝えられている事象だ。

金子船長いわく、魚群探知機やソナーで確認すると、バラシやリリース発生直後にスワットと群れが消えてしまうことが、本当にしばしば起こるそうだ。「意外と繊細なんですよ、シーバスは。だからウチの船ではリリースもポイントから離れたときだけでお願いしています。リリースのためにいったんストラクチャーから遠ざかるタイミングを作ってるので、そのときか、移動時にリリースしてもらうようにしています」

我われツリガチ取材班が震え上がったのは、北風のせいではない。そんな話を聞く前に、すでに2本をバラしてしまったのである。暗雲は、より色濃くなった。シーバスよ、おれたちを癒してくれ……。祈りながらジグを投入する。

シーバスジギングの基本は、フールで食わせることだ。着底したら素早く巻き上げ、落とす。着底。巻き上げ。落とす。この繰り返しだ。

「たいていはフールで食ってくる。巻きで追わせて、落とし

東京湾は、世界一のストック量と言われるシーバス。パラダイス。

潮がぶつかっているあたりはいい感じで波が立っていて、いかにも釣れそうだ。ヨッシーとタカハシゴーは三角形の角から右側を、イチロウとトモキは左側を探る。

トモキ——板倉友基さんは、

例によって「シーバスジギング、初めてなんですう」なんてかわいいうことを言っているが、今回も間違いなくその優しい笑顔でシーバスを虜にするだろう。

と、きたきた、タカ



▲エラ洗いされてバラさないよう慎重に抜き上げるタカハシゴー

て食わせる、というイメージ。だからシーバスジギング専用のジャックル・シーバスアンチヨビメタルはリアウエイトで、フールスピッドを重視した形状になってるんだよ」とヨッシー。だが、シーバスは思いのほか反応してくれない。緩衝工(船舶の衝突から風の塔を守る、三角形の構造物)の周りを、金子船長が攻める。

我われ釣り人は、できるだけストラクチャーの際にジグをキヤストし、着底、巻き上げ、フールを繰り返し返す。

ハシゴーの船中1本目を皮切りに、バタバタと釣れ始めた！「バラすなよ、バラすなよ！」は、決してダチヨウ倶楽部のなフリではない。決して高活性とは言えない厳しい状況下で、群れを散らさないように懸命だ。